

はじめてアメリカへ行ったときのパスポートがとってあった。黒革の立派な表皮に金菊のご紋章が押印されている。

第 451690 小林昭美 右は日本国民であって、研究のため諸国へ赴くから通路故障なく旅行させ且つ必要な保護扶助を与えられるよう、その筋の諸官に要請する。

昭和三十七年七月五日 日本国外務大臣 小坂善太郎

当時のパスポートは1回渡航するごとに発行するもので、現在のように multiple entry ではない。1ドルが360円で、外貨事情が悪かったからドルの持ち出し制限があり、200ドルまでしか持ち出すことができなかった。200ドルとはいっても、大卒の初任給が1万2000円程度だった時代である。旅行用トランクも samsonite のようなのはなく、新橋の内田洋行でベニヤ板にビニールを張ったものを買った。

立派なパスポートとわずかばかりのドルを携えて羽田を出発した。家族や友人が羽田まで見送りに来てくれた。飛行機はプロペラ機最後の大型機 DC7 である。

田崎先生の時代は氷川丸だったから、横浜港でテープを投げて別れを惜しんだのであろう。氷川丸はシアトルへ向かったはずだが、日航機はハワイに向かっていった。フルブライト留学生には約1カ月のオリエンテーションがあって、ハワイ大学は夏休み中だったので大学の寮に泊まって、フィリピンやタイなど東南アジアからの留学生と一緒に、午前中はアメリカの歴史や社会について勉強し、午後はバスでワイキキに出て泳ぐという生活であった。おかげで海水パンツの跡が冬まで残っていた。

大学のカフェテリアでは好きなものを選んで食べられた。日本では遠足の時にしか買ってもらえなかったバナナや、パイア、パイナップルなどがいくらかでも食べられるのがうれしかった。「ランチも1ドルくらいは食べないといけませんよ」と先生にいわれた。NHKの食堂ではB定食が35円、A定食が60円という時代だったから、昼飯に360円も使うのはもったいないと思った。

ハワイでの1カ月はアメリカン・ウェイ・オブ・ライフとの出会いであった。ティッシュペーパーというものはじめて見た。日本ではざらざらのチリ紙が使われていたので、その手触りの柔らかさに豊かさを感じた。スーパー・マーケットというものも日本にはまだなかった。自動車が各家庭に1台、あるいは2台もあるのも、聞いてはいたが驚きだった。

真珠湾攻撃で日本軍に沈没させられたアリゾナの記念館を見に行った。ハワイには日系人も多く住んでいたのだからとっていやな思いをすることはなくてすんだが、つらい経験だった。広島原爆のほうが非人道的ではないかという人もいるが、それではお互いの愚かさの応酬になってしまう。真珠湾攻撃の歴史はそれとして重く受け止め、広島原爆はまた別の歴史的事実として受け止めるほか、自分の頭のなかを整理する方法がなかった。

パンチ・ボウル（無名戦士の墓）も訪ねた。緑一杯の広い敷地に白い墓石が無数に並んで

いた。墓石に十字架はあるものの宗教色のない墓地で、日本の千鳥が淵にあたるといえるだろう。

ハワイはアメリカ50番目の州で、州になったのは1959年である。ハワイの原住民はアウトリガー・カヌーでポリネシアから渡ってきたと考えられている。ハワイは王国で18世紀にはカメハメハ王がハワイ王国を建国していた。その後アメリカはハワイを準州として、この島に海軍基地を建設した。それがパールハーバーである。

ハワイではカウアイ島に行った。太平洋戦争中に使われたDC3で、今の飛行機は主軸の下に車輪が2つあり、まず主軸の下の子車輪が着地して、機長席の下の子車輪が着地するのだが、DC3は尾翼の下に第三の子車輪があるという構造だった。第二次世界大戦以降の航空機の発達は眼をみはるばかりである。後にワシントンのスミソニアン博物館で日本の名機ゼロ戦なども見たが、それは今のジェット機に比べると竹トンボのようであった。

1860年には万延元年遣米使節が布哇（ハワイ）に立ち寄っている。使節の乗ったポーハタン号は外輪船で米利堅（アメリカ）の桑方斯西哥府（サンフランシスコ）に直行する予定であったが、思いのほか逆風が多く石炭を多く費やしたため、太平洋中にあるサントウイス島（ハワイ）で石炭を補給する必要があったようである。

使節はこの島の王（カメハメハ四世）に会っている。「国王とはいっても島の酋長も同じことなり。王妃の名はエンマ、年のころ二十四、五、顔は黒いが、おのずから品がある。両肩をあらわし、薄ものをまとい、乳のほとりをかくし、腰から末は美しい錦のはかまのようなものをまとい、首には連ねた玉の飾りをつけて、生きたあみだ仏と疑うほどである。」と村垣淡路守範正は記している。そして、つぎのような歌を残している。

わた津海の 竜の宮とも いはまほし うつし絵に見し 浦島がさま

【予告編】

- 第3話 何でも喋ってやろう
- 第4話 ニューヨークの日々
- 第5話 海に火輪を
- 第6話 Back to 1960's
- 第7話 帰国—日本文化圏再突入
- 第8話 アメリカ再訪
- 第9話 アジア回帰
- 第10話 アメリカ NOW